説教20210523イザヤ44：1-8　使徒2：1-13

「恐れと驚き」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

皆様、ペンテコステおめでとうございます。今日は、主イエスの、驚くべきそして恐るべき御業によって、この世に、この教会が生み出されていますことに、感謝と賛美を捧げつつ、この教会の誕生日を共にお祝いしたいと思います。

驚くことと恐れること、この二つは考えてみますと、大変似ていて、どこが違うのかわからなくなってきます。例えば私たちは理解しがたい人に出会ったとき、驚くとほぼ同時に、その人を恐れることでしょう。また私たちは恐るべき全知全能の主なる神を恐れ、そのなされる御業に驚かされます。

このように、恐れと驚きとは隣り合っていて、どこまでが恐れで、どこまでが驚きなのかは、そんなには判然としていないのです。しかし、恐れと驚きには、違いがあるのもまた確かなことでしょう。

昨日から、ずっと恐れと驚きの違いについて、私は思いをめぐらしておりました。なんと無駄な時間を費やして、と思われるかもしれませんが、思わざるを得ないのです。これもまた主なる神が私に強いる業なのかも知れません。

恐れと驚きの違い、それは端的に言えば、恐れというのは、私たちに付きまとってくるもの、ネチネチして、粘着質で、なかなか離れてくれないものであり、一方、驚きというのは反対に、一瞬にしていなくなり、はじけていて、弾力性があって、手元にはおいておけないものであるということです。

今日の聖書箇所では、概して、イザヤ書では、恐れが、使徒言行録では、驚きが描かれています。

今日の招きの言葉もそうですが、イザヤ書では「恐れるな」という言葉が再三語られています。すべて、主なる神が、私たちを励まし悟らせるために、私たちに懸けられた御言葉であります。恐れるな、恐れるな、と何回もいうということは、当時の人々が相当、何かに恐れていたことの証しでありましょう。不思議なことに、当時の人々、何千年も前のイスラエルの人々が抱いていたこの恐れは、今の私たちに無縁なことではありません。私たちは、今、得体のしれない恐れに取りつかれているようです。私たちは新型コロナウィルスそのものを恐れているというよりは、それにまつわる、様々な忌まわしい状況、例えば医療崩壊とか、クラスターとか、そういった言葉自体に恐れを抱いていることも多いかも知れません。芥川龍之介という作家は、「将来に対する唯ぼんやりした不安」を抱いて自殺しましたが、今の世が、ぼんやりとしたとらえどころのない恐れに付きまとわれないことを願います。

主なる神は再三、恐れるな、恐れるなと語ります。しかし私たちは、ここで旧約聖書の箴言の冒頭に記されている「主をおそれることは知恵の初め」という御言葉をも同時に想起しなければなりません。主なる神はイザヤ書で、恐れるな、恐れるなといって、私たち人間を励まされますが、実は、主なる神は「全知全能であるわたしをこそ恐れなさい」と言いたかったのではないでしょうか。主なる神にしてみれば、「全知全能であるわたしをこそ恐れ、いう通りにしていればあなた方は守られる」ということは当たり前のことでありましょうが、「私を恐れなさい」などとストレートに言ってしまえば、かえって、人々が離れて行ってしまって元も子もなくなる、といった主なる神の葛藤が思われます。だから父なる神はそこのところが明言できなかったのですが、御子である主イエスは次のようにはっきりと私たちに語っておられます。マタイ福音書10：28「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

主イエスはここで、私たちが人間を恐れるのではなく、主なる神をこそ恐れなさい、と私たちに明言されているのです。

いまここにいる神をこそ恐れるということは、間違いなく、私たちをぼんやりとした得体のしれない恐れから解き放ってくれることでしょう。まだ信仰に入っておられない方も、ぜひこの点を心して、主なる神を礼拝して頂きたいと思います。

さていよいよペンテコステ、聖霊降臨の出来事が記された使徒言行録の聖書箇所に入りますが、ここでは恐れに代わって、驚きの情景が横溢しております。多くの人がこの五旬祭の日にエルサレムの街に集められていました。2節から「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」この描写からしてただならない驚くべきことが起こっていることが知らされます。実際集まってた人々はこれに驚かされます。そこには一抹の恐れの念も混じっていたかも知れません。しかし、その情景というのは総じて、はじけていて、弾力性がある驚きに支配されたものであったことでしょう。この情景を想像してみますと、まさにお祭り騒ぎのような、喧騒と驚喜乱舞に満ちた場面を思わされます。聖霊が下り、聖霊に満たされた使徒たちの姿を見た、周りの人々のリアクションは様々でした。ある人々は驚き怪しみました。またある人々は「いったいこれはどういうことなのか」と互いに言い合い驚き戸惑いました。またある人々は「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言い表して、嘲りました。

　驚きというのは、恐れのように粘着質で取りついてくるようなところがありませんから、ここで驚いた人々は、人それぞれにはじけて、思い思いにその驚きの念を様々に言い表しているようです。そこにはある種の陽気さ、こだわりのなさ、多様性、寛容性、自由さが感じられます。人々はこのペンテコステの日に、聖霊降臨という驚くべき出来事によって、驚かされて、今まで取りつかれていた恐れから解放されたかの様であります。私はそこのところに、クリスチャンだけではなく、このペンテコステ、聖霊降臨のお祭りの日を、すべての人々と分け隔てなくお祝いできる可能性を感じます。

　とにかくこのペンテコステという日は、私たちが全員で喜び合える、恐れから解放された驚きのお祭りの時なのです。

私たちは、しばしその喜びのお祭りの時に身をおいて、全員で喜んでいきたいと思います。

さて、今日の使徒聖書箇所の登場人物である使徒たちのことを覚えてまいりましょう。前後の聖書箇所に記されていることも必要になりますので、この使徒言行録の1章と2章をぜひ通して読んでいただきたいと思います。弟子たちが、復活の主イエスとこの地上で４０日間を過ごした後、いよいよ主イエスが天に昇られる日が来ました。その時主イエスは使徒たちに「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」と言い残されて、後日、使徒たちに聖霊が降臨することを約束されました。主イエスが地上から離れ去り天に昇られる姿を、弟子たちはなごりおしく、見つめていたといいます。それはあたかも遠くへ行ってしまう恋人を見送る人の様であります。これほど、弟子たちは主イエスを頼りにして慕っていたのです。ですから、彼らが、その主イエスが言い残していった約束、

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」という約束に弟子たちがどれほどより頼み、自分たちの拠り所としていたかは、想像に難くありません。彼らは主イエスのこの約束を固く信じて決して疑うことはなかったでしょう。そしてその聖霊降臨の日を今か今かと待ち望んだことでしょう。

こういった弟子たちの待ち望む態度ゆえに、今日の聖書箇所での弟子たちの喜びというのは、周りの人々が示したお祭り騒ぎ的な狂喜乱舞とは一味違ったものとなっています。それは、クリスチャンには想像できる喜びでありましょうが、それは、主イエスが約束通り聖霊を下されて、その聖霊に満たされて、主なる神に抱かれた何とも言えない静かな安らぎを伴う喜びであります。一方まわりにいた人々は今一、その喜びが理解できず「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」などとも言っています。

つまり、使徒以外の周りの人々がこの時抱いた驚き、というのは一時的にはじけた喜びに過ぎなかったのです。ですが、その狂喜乱舞する人々に弟子の一人であるペトロはすかさず言うのです。「わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。・・・。『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。・・・ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。・・・神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。・・・だから、わたしの心は楽しみ、／舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。」このようにペトロは人々に説教をしました。

人々はこれを聞いて大いに心を打たれたといいます。そして多くの人々が洗礼を受けて、仲間に加わりクリスチャンとなりました。

　主なる神は、この人々が狂喜乱舞するお祭りの時を見計らい、人々に主イエスという救いの道をお示しになりました。それは日頃から、主なる神をこそ恐れていた使徒たちが用いられた時でもありました。この時エルサレムのお祭りに集められた多くの人々は、聖霊の業によって驚かされ、日頃付きまとわれている恐れから一時的に解放されました。ここに驚きのもつはじけるような喜びがありました。しかし、残念ながら、はじけるような喜びは、はかないものであります。あっという間に終わってしまいます。そこですかさず、聖霊に満たされ主にある喜びを知る弟子の一人であるペトロが、主イエスの救いの恵みを人々に知らせたのです。

　弟子たちは、十字架に至る主イエス、そして復活の主イエスとずっと共にいましたから、主を恐れることの恵みを知っておりました。恐るべき主から離れず、主にしがみついていることで得られる救いを知り、日々そうして生きていましたから、この時到来した伝道の千載一遇のチャンスを決して見過ごすことはなかったのでした。

　今日はペンテコステの日に、主の驚くべき御業を味わっていますが、私たちにとって、恐れと驚きはどちらも大事なことであります。しかし、どちらもそれは主なる神によることでなければなりません。私たちは主を恐れつつ、また主に驚かされつつ、日々の歩みを進めながら、主に守られて、この地上の一歩一歩を確実に前に進めてまいりましょう。

いのります

天にいます父

私たちは、死をも滅ぼし、私たちに永遠の命を与えて下さる、あなたの驚くべき御業を信じます。そして、おそるべきあなたにすがりつつ、いかなる闇の中も恐れることなく歩ませてくださいます聖霊の御業に感謝いたします。私たちを離れることなくいつも共におられる聖霊の神によって、私たちがあなたの御業を告げ知らせていくことが出来ますように。

今、この聖霊降臨によって集められ生み出されたこの教会であなたを礼拝賛美出来ますことを感謝いたします。この地にある諸教会がますます豊かに祝福され、あなたの栄を表していくことが出来ますよう、ますます私たちを励まし導いてください。

今、ご自宅で礼拝されている方々にも等しく聖霊の満たしがあり、御言葉によって勇気と力が与えられます様に。

今、虐げられている方々、困難に直面されている方々、悲しんでいる方々を覚えます。どうかこの聖霊降臨の日に、あなたの聖霊を受け取り、たぐいまれなるあなたの恩寵に導き入れられます様に。全ての人々のそばにあなたが寄り添って、慰めと励ましをお与えください。